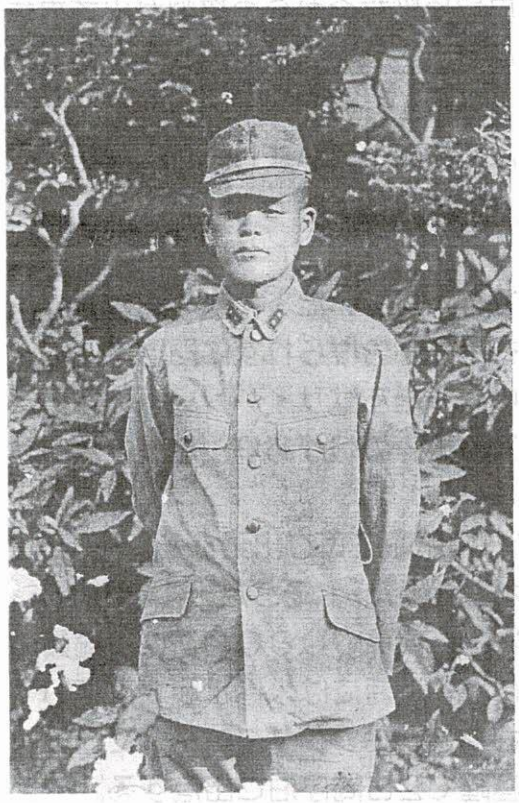
父の戦争体験

１９４４（昭和１９）年6月１４日～１９４５（昭和２０）年１１月２４日

２０２１年１２月



２１才の父

姫路　ー　広島　ー　門司港　ー　五島列島
(1944.6.14)

済州島付近　ー　台湾（基隆）　ー　高雄港
バシー海峡　ー　ルソン島西海　ーバタァン半島
マニラ港　ー　セブ港　ー　カガヤン港
デルモンテ高原　ー　ダバオ(1944.7.28)

ダバオ　ー　ミンタル　ー　ラプイ　ー
タモガン　ー　トマヤン　ー　バラカヨ
(1945.8.8)

アポ山　ー　収容所
（山深いジャングルに入る）　(1945.9.12)
タロモ港　ー　日本（浦賀港）　ー　自宅
(1945.11.9)　(1945.11.24)

〈資料〉

第１００師団　タバオ　総数
１８，７４３人

戦没、病死、行方不明	１２，０４２人	
生還者	６，６２７人	（３５%）
（内）独歩１６４大隊　総数	１，２２０人	
死亡	８０５人	
生還者	４１５人	（３４%）

大正１２年生まれの父は平成１４年７月に８０才で亡くなりました。

亡くなる１０日くらい前には死期を意識しだし、付き添っている家族に「若い頃の仲間は戦死してあの世やからなあ」と言うようになっていました。父の戦争はずっと続いていたようです。

父は６０才台になった頃に第１００師団の戦友会に一度だけ参加していましたが、戦争を嫌っていました。

父の遺品整理の時に、戦争中ともに行動した戦友の日記や戦友会からの資料が出て来たので、長女の私が保管していました。その資料や父から聞いた話を元に父の戦争体験を今回まとめてみました。

長身で屈強な父は「徴兵検査で甲種合格だった」とよく自慢していました。

戦地に出かけるまでは姫路練兵場（姫路４６部隊）で訓練していた。

１９４４（昭和１９）年6月１４日　　２１才の父は行き先も告げられずに門司港に向けて姫路駅から軍用列車にて出発、翌日広島駅で停車中自分たちはサイパン島への増援部隊であることが判明する。しかし船便がなくサイパン島玉砕の報があり、増援中止命令が出て直ちに姫路に帰る。

同年6月２９日　　マニラ第１４軍司令部に転属となり姫路駅を再び出発する。「一ヶ月早く出発していればサイパンで死亡していたかも知れなかった。」そうだ。

翌３０日、門司港にて日昌丸（５０００トン位の貨物船　乗員６０００名）に超満員の兵士が乗船し、７月３日に門司港を出発する。すでに日本近海には米潜水艦が来ていて父の乗った船も五島列島沖で早くも米潜水艦に発見され北西へジグザグコースで進み、済州島付近で高速船団１０隻を編成し台湾を南下し基隆で２日間停泊ご出港する。

7月7日　　高雄港に入港した後、海上浮遊機雷多く徐行し機雷を排除しつつ船行してバシー海峡を無事通過する。

（当時、バシー海峡では２０隻位の船団のうちマニラに着けたのは３，４隻となるほど米潜水艦の攻撃が激しかった。この海峡で死亡した兵は３０万以上にのぼる。）

船行中にルソン島西海沖を南下しバタァン半島にさしかかった際の7月１３日朝8時頃同行していた日関丸（日蘭丸？）が米潜水艦の魚雷１発を受け沈没する。（１４８人中６９人生き残る）マニラ船行中に隊員１名が船底転落死亡し水葬する。

7月１５日　　マニラ港到着する。上陸し学校跡の宿舎に入る。教室に毛布を敷き数百人の兵隊が横になった。マニラ市街は赤青のネオンの灯も見られた。マニラ港に滞在中波止場の荷役に狩り出された。沈没した日関丸（日蘭丸？）に第１００師団司令部衛兵隊要員が乗船していて、その時代替として急きょ任務の交代命令を受ける。

7月２０日　　紅丸（元別府航路の客船）に乗船しマニラ港出発する。

7月２３日　　セブ港を経てミンダナオ島北端の要港カガヤンに到着し食料弾薬を補給する。

7月２５日　　ダバオに向かって徒歩にて出発（病弱者約３０名残留するも数日後カガヤン大空襲あり死者数名出る）。カガヤンを出てヤシの並木の海岸沿いの道を行軍しデルモンテ高原へ上る坂道をあえぎながら登る。

７月２８日　　姫路から１ヶ月半をかけてやっとダバオ第１００師団司令部に到着する。（すでに１９４４（昭和１９）年３月３１日パラオの日本連合艦隊の基地が米軍の爆撃で甚大な被害を受け、艦隊司令部をミンダナオ島ダバオに転進させようとしたが、司令官は行方不明、参謀長機が不時着後１０名がゲリラによって死亡している。ミンダナオ島は日米激突の第一線地域となり、米軍の上陸が予想された。１９４５年４月１７日ミンダナオ島に米軍上陸）

ダバオからミンタルへ行軍する。病弱者が死亡。空襲、銃撃を受け多くの者が死亡する。

１０月２５日　　ミンタルに到着。

１１月中旬　　バゴに錬成隊が作られ病気離隊組約２０名収容。

１９４５（昭和２０年）１月　　ミンタル周辺空襲され、バゴ錬成隊にも数名死亡者が出る。

３、４月　　ミンタル周辺空襲が激化し、米軍がミンダナオ島西方に上陸しミンタルに向かって進撃の連絡あり。

５月２日　　ミンタル撤退しラプイに転進。夜の行軍で激しい雨で道はぬかるみ難航する。休憩しながら米軍より隠れて谷底で宿泊する。１ヶ月の行軍中病人が出たり敵中斬り込みや敵前視察、爆撃、砲撃を受け戦死者が多く出る。

６月１３日　　ラプイも安全でなく全員ダガモンに向かって退却を始めるも米機が来て、なかなか行動できず麻畑に隠れる。

６月１４日　　再出発。午後４時から夜に雨が激しくなり疲労と暗さとぬかるみで歩行困難の中行軍する。

６月１５日　　夜明けにダガモン到着。山のふもとに天幕を張り幕舎を作る。駐屯中も険しい坂道を上ったり下ったりし空腹と睡眠不足で酷い環境に疲れ切る。空襲が激しくなり、爆撃で重傷者が出たり戦死者が出る。病弱者１０数名。米機から機銃掃射をあび降伏勧告ビラ散布。その時は武器弾薬はおろか食べ物も欠乏し救援の望みは絶たれ戦意を全く喪失し生きるのに精一杯。定期的に米軍の砲撃が続き、幕舎もズタズタになった。

６月２７日　　夕闇が迫る頃にダガモンを撤退（ダガモンには１２、３日駐屯）。

７月３日　　ダガモン川沿いを行軍。

７月１０日　　アメリカの空撃に脅かされ、低空飛行でたくさんのビラが散布される。

７月１２日　　バシヤオに向けて撤退（最後の食糧を給与される。米４合とうもろこし大豆少量）。

７月１５日　　空撃に怯えながらバシヤオ着。

７月１６日　　師団長衛兵に命じられる（父を含め４名）。疲労で銃を持って立っていることも苦痛。この頃兵士間で逃亡の計画がささやかれたり、自爆する者もあった。

７月２０日頃　　食糧募(?)集隊が編成され、４０名が５ヶ分隊に分かれ行動することになる。（すばしっこくて元気な者が選ばれる）

７月２１日　　「各自２０kgの食糧を募(?)集し、８月１５日までに現地に全員帰隊せよ。脱走者は銃殺。我々は諸君の帰隊を待つ。」との訓示あり。心ひそかに「二度と帰って来ない、また帰れるとは思えないと…」父の班は９名で行動する。（８月末に１名がマラリアにて途中で死亡する。）父もマラリアに罹患する。

７月２４日　　アメリカ軍の歩哨線に近づく。米兵のトラック兵隊を見る。さつまいも、

里芋、パパイヤ収穫する。
7月25日　さとうきび、マイス多量収穫。
7月27日　トマヤン着。食糧宝庫。10日位滞在する。
8月6日　スクレス方面に米軍が行動をはじめ、危険になりトンカラン方面に向け移動（食糧1人米　5～6升）。
8月8日　トマヤンを出発して2日目にバラカヨと呼ばれる所に小屋がありその小屋がフィリピンでの最後の宿舎となった（班を組み隊を離れて約20日がたっていた）。
8月9日　米やいもは手に入ったがタンパク質や脂肪は欠乏する。最大の不安は塩がなくなったことだった。（イモは乾芋にし持って行った）
8月下旬　同隊、班の戦友が1人マラリアで死亡する。麻畑の中に穴を掘り葬った。けし炭を削り粉末にし水で溶いたものをマニラ麻を細く束にした筆で木版に「○○の墓」と書き墓標を作った。灯火もなく暦も時計も紙も鉛筆もない。鏡もないので顔も剃らない。極限状態に置かれた原始的な生活が続いた。その頃は米機の来襲もなかったがアボの山深く取り残された敗戦兵だった。
9月9日　バラカヨ山中の下方からマイクの音がした。「ダバオ憲兵隊長○○の名によって、アメリカとの戦争はここに終結した。山に隠れている兵は直ちに下山せよ」とあったが、真意について疑問を持ったが、仲間1人が山を300m程下りていき話をした。「広島、長崎に新爆弾が投下され全滅した。日本は無条件降伏した。」「米軍のもとに行けば、命は保障され、食事も与えられる。宿舎もある。必ず日本に帰還できる。」と言われた。「戦友7名と山にいるので、一度帰って一緒に来る。」と話し山中に帰ってきたが、軍曹や他の下士官は「それは嘘だ。謀略に決まっている。捕虜になると炭鉱や鉄道で使役にされ、役に立たなくなれば殺される。山に残る。」と言う者と「この山奥にいては餓死するか病死、あるいはゲリラに殺されるだけだ。」と山を下りることに半信半疑で了解する者もいた。再び仲間1人が山を下り米軍と交渉し、「明後日の太陽が真上に昇ったときに皆で下山する」こととなり「それまでの食糧を給与する」と言ってビスケット、肉、チーズ、コーヒー、角砂糖、コンビーフの缶詰を米軍の天幕につつんで持ち帰ってきた。
9月10日　爆音がして目を覚ました、米軍の偵察機がビラを山中一帯に配布して飛び去った。ビラには「天皇の終戦の詔書が、裏面には師団長原田次郎の署名の布告が掲載されていた。これで全員が山を下りることに決まる。
9月12日　数台のトラックが迎えに来て、トラックはダリオン飛行場方面に向かった。途中に、車中の日本人に「日本のバカヤロー」などとフィリピン人に数々の罵声を浴びせられ石も投げられた。
9月12、13日　収容所に到着する。持ち物検査され持ち物は全て取り上げられた。一収容所は250人位で20人単位の米軍テントが張られ、その中に毛布を敷き各自の場所が決められた。収容所は10数カ所あり全部で何千人もいた。高い鉄条網に囲まれていた。
9月14、15日　衣類は一切焼却され米軍支給の帽子、靴、軍服（青緑色）に着替えさせられ上衣の背にはPW（捕虜）と黒く大きく書かれていた。石けんが配給され、シャワーで垢を洗い落とす。収容所の本部で米日系二世兵によって身上調査を受け日本で

の住所、氏名、職業、生年月日、兵種、階級、所属部隊等を聞かれた。両手の指紋、上半身の前と横の写真２枚が撮られた。

９月１６日　　便所作り。小便は太い竹筒を斜めに地面に埋め込む。大便用はドラム缶を半分土に埋め、上部は穴のあいた木のふたを取り付ける。１日１回ガソリンをぶち込み糞便を焼いた。

９月１７日　　キャンプ内で色々なデマが飛ぶ。「日本に本当に帰れるのか、それは何日頃になるのか。ソ連に連れて行かれるのでは…」

９月１８日～１０月１日頃　　食物は本船が入港するまで、半食との通達あり。空腹を抱えて、何もすることがなく退屈だった。

１０月１２日　　タロモ港に本船が入港し毎日交代でトラックで使役に出かける。

１０月１８日頃　　この頃からぼちぼち帰還の事がささやかれる。この頃各収容所で慰安演芸会が催される。

１０月２３日～２５日　　第１回の乗船者名が発表される。順次発表される。

１１月８日　　乗船する。

１１月９日　　出港する。船中では南方潰瘍、マラリア、胃腸病の者が多かった。米製のキニーネ、消化剤、下痢止めを使用した。

１１月１７日　　日本に近づく。右舷に伊豆大島が点々と、正面に真っ白い富士の姿、左に日本アルプスの遠山が見え大歓声が湧く。船は浦賀に入るが、その夜は下船できなく船中泊。

１１月１８日　　上陸する。日本茶の接待を受け、夕食には尾頭付きの純日本食を食べる。上陸後手続き、その他で数日過ごす。

１１月２３日　　横須賀より汽車で出発し２４日帰り着く。

父の妹（現９５才）に聞いた話では、終戦３ヶ月後に畑に出ていた家族の所に父が来て「帰った！！」と言ってから三日三晩眠った。マラリアに罹患した体はガリガリに痩せ細り数ヶ月ふらついた。

～父の話しから～

「現地のゲリラを銃で撃った事がある。」

「川辺でキャンプをしていて目を覚ますと、川の向こう側に米軍がいて機銃掃射を受けた。」

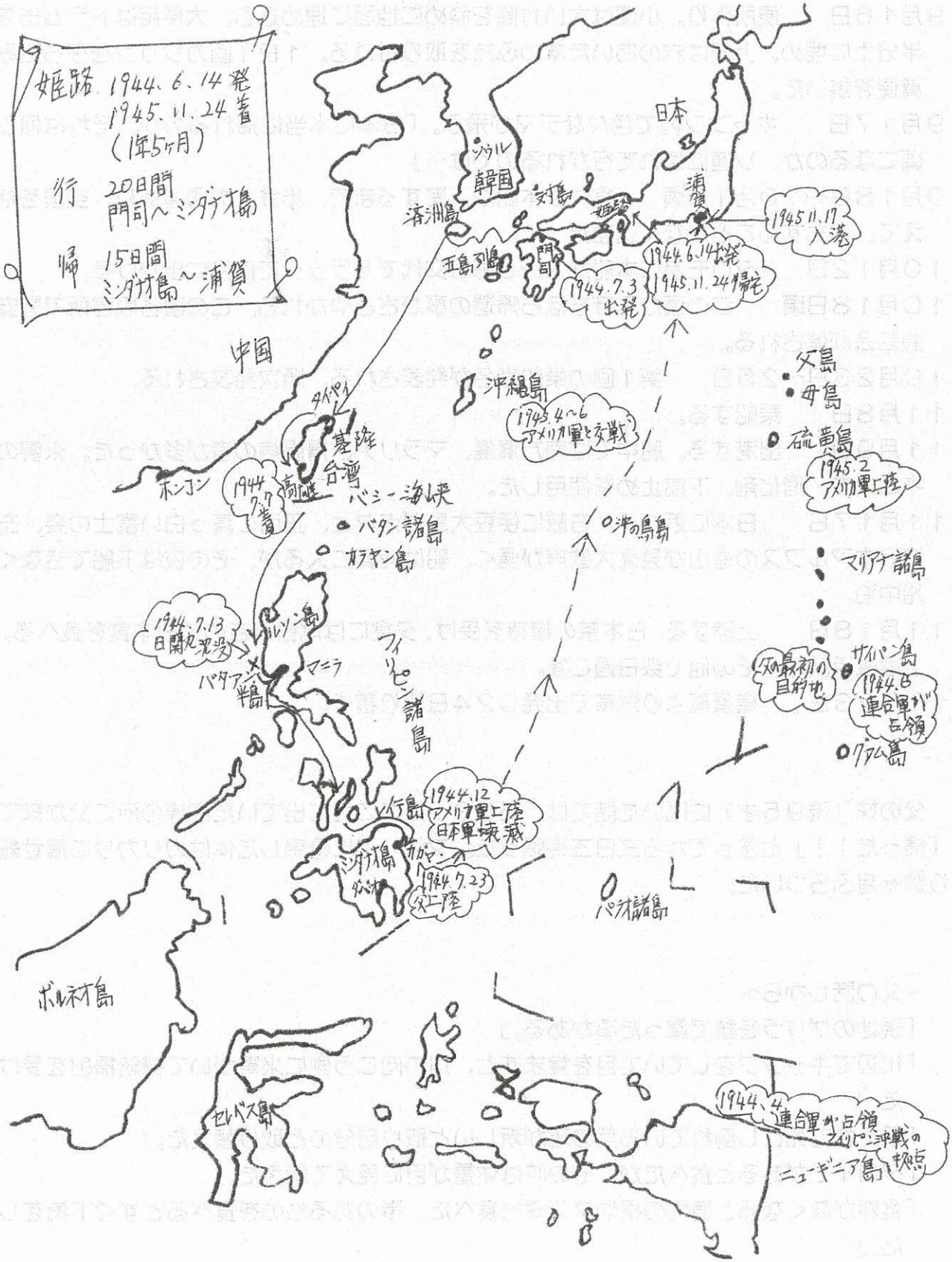
「撃たれて死亡し倒れている兵の靴が新しいと取り自分のと取り替えた。」

「タロイモがあると食べたが、その時は体重が目に見えて増えた。」

「食料がなくなると植物の根やネズミも食べた。毒のあるものを食べるとすぐ下痢をした。」

「自分もマラリアにかかったが仲間がいたので助けられた。」

「米軍に包囲され逃げ場を失ったので包囲の中に入り息を潜めていた。夜に倉庫に入り食物を取った。仲間が役割分担したので取れたのだと思う。」


姫路 1944.6.14発
1945.11.24着
(1年5ヶ月)
行 20日間
門司～ミンダナオ島
帰 15日間
ミンダナオ島～浦賀
日本
ソウル
韓国
対島
浦賀
姫路
済州島
五島列島
門司
1945.11.17
入港
1944.6.14出発
1945.11.24帰宅
1944.7.3
出発
中国
父島
母島
沖縄島
1945.4～6
アメリカ軍と交戦
硫黄島
1945.2
アメリカ軍上陸
タイペイ
基隆
台湾
ホンコン
1944.7.7着
高雄
バシー海峡
バタン諸島
カラヤン島
沖の鳥島
マリアナ諸島
1944.7.13
日蘭丸沈没
ルソン島
マニラ
バタアン半島
フィリピン諸島
父の最初の目的地
サイパン島
1944.6
連合軍が占領
グアム島
V行島
1944.12
アメリカ軍上陸
日本軍撤退
ミンダナオ島
ダバオ
ガバヤン
1944.7.23
父上陸
パラオ諸島
ボルネオ島
セレベス島
1944.4
連合軍が占領
フィリピン沖戦の拠点
ニューギニア島